

『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』 におけるジェイムズ・ステュアートの蒸留業論

渡 辺 邦 博

1. はじめに
2. 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』へ、
＜『同誌』No. 9517, 1779年10月4日, 月曜日＞
3. むすび

1. は じ め に

数回にわたって私は、1779年9月から10月にかけての『エディンバラ・イーヴニング・クーラント *Edinburgh Evening Courant*』（以下単に『クーラント』と略称する）の記事を紹介してきた。⁽¹⁾ その最後にあたる今回、おそらくはジェイムズ・ステュアート（James Steuart, 1713-1780）の筆になるものと推定される、1779年10月4日付け『クーラント』の蒸留業関係記事を紹介して、ステュアートをめぐる蒸留業関係記事の考察にひと区切りをつけたい。

本稿で紹介する記事の著者が、明らかに『クーラント』の1779年9月27日号所載の記事に應える形で議論を展開している点で、さらにその記事内容のⅠ－Ⅷの「示唆」に対応した議論をしている点で、バハン伯の証言に言うJ.ステュアートの論考である可能性が大変高いのであるが、その根拠に関する詳細は、私の一連の考察を参照して頂くこととし、ただ1点、この記事の表題は、従来使用されてきたような、‘Observations on the state of the distillery and brewery’などではなく、今日でもよく見られる新聞雑誌の編集者に対する寄稿であるから、それは、‘For the Edinburgh Evening Courant’（『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』へ）とするのが妥当であることだけを指摘して、まず、技術的なことを述べておこう。

仔細に見ると、この記事の著者がコメントを加えている8つの「示唆」は、必ずしも9月27

(1) 拙稿「1779年のスコットランド蒸留業問題をめぐる若干の新聞記事について——晩年のジェイムズ・ステュアートと内国消費税問題——」『産業と経済』14-2, 1999年9月, 「『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』におけるJ.ステュアートの小論について」『産業と経済』14-3/4, 2000年3月, 「『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』における蒸留業関係記事」『産業と経済』15-2, 2000年9月。

日号の忠実な引用ではない。そこで、本稿では、各パラグラフの後に注を付して、引用された原典との相違が分かるようにしておいた。また、本文でイタリックになっているところは、傍点を付してそれと分かるようにしておいた。

さて、本稿で紹介する記事の著者の問題を棚上げにしても、その前後、つまり、1779年9月11日号や9月27日号、さらには本稿で紹介するものと同じ10月4日号に掲載された、諸論説の著者が誰であるのかという問題も存在するが、それについては今のところ不明としか言えない。複数なのか、一人なのか、それらとこの記事の著者がどのような関係にあるのか、ということについても、残念ながら、同様である。

次に、当該記事における、いわゆる8項目の順に、記事内容の要点を示そう。

この論説は、9月27日の論説が他の記事に比べてもっとも長く、いわゆる8項目にわたる「示唆」の前でも、かなり詳細に法律問題を展開していることも加味すれば、それによって本稿の論説が誘発されたとみなせるのかもしれない。そこで、

第一の示唆に言う、大蒸留業者が大麦の買い付けに参入すると、買い手間の競争が激しくなるという点について、著者は9月27日号の著者に賛同するが、他方で、そうした大蒸留業者が、製造者として特権を持つような事態が生ずると、価格の固定化への懸念があるとして、従来、小蒸留業者と農業者たちの間に成立していた、「便利で利益のある」地域的な市場関係に注意を喚起している。

第二の示唆、蒸留業においては、材料である大麦や、燃料その他が嵩張る性質を持つため、大蒸留業者が地域的に散在する結果となり、結合の怖れは少ない、と言う点に付いては、独占の形成にとって、その点は必ずしも障害とならない、と判断している。

第三の示唆、仮に他部門と比べて、蒸留業に法外な利潤が成立しても、新規参入によって正常な状態に復帰する、との考えについては、そもそもこの業種の場合、参入障壁が小さなものではないので、独占の弊害が否定し難いし、微力な新規参入者があっても、長期的には敗退せざるをえない、と退けている。

第四の示唆に言われる、大蒸留業者による、仕入れ上の利点や、いわゆるスケールメリット上の優位については、むしろ逆であって、小蒸留業者の方が、仕入れ価格の点でも、燃料の節約の点でも有利なため、最低価格で販売できるという立場をとる。

第五に、大小の蒸留所で製造されるスピリッツの品質上の優劣については、特に反論の具体内容を示していない。

第六の示唆に言われている、大蒸留所が普及すると、原料運搬の点で改善が見られる点については、従来の蒸留では、大麦から麦芽へ、麦芽からスピリッツなどへの、運搬上の不都合があったという認識そのものが、事態の誤解であると再度、念が押されている。

第七の示唆では、家畜用の飼料が大蒸留業者から、安く入手されて、遠隔地の改良に貢献すると強調されているが、それにもまして重要なのは、調達を手近に行なわれる原料によって、

アルコールが製造されることなのだということである。

第八の示唆では、アルコール製造が農業者の勤労を削いでいるとされているが、むしろ小蒸留業者がアルコールを製造していたことが、勤労の刺激となっていたのだ、と反論が加えられている。

これ以外の記事の論調に見られるように、独占の可能性を否定して、大規模蒸留業者の参入を安易に是認した立場と、この記事の著者とは、一線を画している点に注目すべきであろう。

一連の記事では反対行動が諫められている現行法について、著者は、その賛否に関する明言を慎重に避けてはいるが、呼びかけの対象であるジェントルマンたちは、軽挙を行なわないと見なしている点で、より高い視点に立っている、とも考えられる。

次に節を改めて、著者の言うところを聞いてみよう。

2. 『エディンバラ・イーヴニング・クーラント』へ、 ＜『同誌』 No. 9517, 1779年10月4日、月曜日＞

「先月の27日月曜日の『クーラント』誌の1著者は、蒸留業に関する最近の法律問題について、スコットランドのフリーホルダーに対する演説においてかなり大きな場所を割いていた。それほど多くの人々が問いかけられ、その問題が、その著者によって本当に重要であると認知されるとすれば、彼が、その問題を十分に調べ上げるために、少なからず骨を折ったとか、しかるべき手だてを講じたと考えられても無理はないだろう。どの程度まで彼がそれを行なったかは、少し注意してみれば明らかとなる。

彼が、スコットランドの土地紳士たち (landed gentlemen) を説得しようとするのは、蒸留業者に関する議会の最近の法律を構成する諸規制によって、彼らの利益は少しも影響を受けるはずがないし、ましてや彼がそう呼ぶところの、8つの異なった示唆を考慮してみればなおさらである、ということである。

第1に、彼の言うところは、「これらの諸規制は、その市場に多数の大規模な蒸留業者を、競争者として登場させるのだから、大麦をめぐる競争を減少させるどころか、増大させる傾向を持つ。」、ということになる。競争をもっぱら一団の人々に制限することは、競争を増大させる1つの新たな方法であると認定されなければならない。もしも、蒸留業者たちが、蒸留酒を製造し販売する排他的特権を持つことになるのなら、それら（スピリッツ）の製造に必要な材料を購入する場合に、どのようなものであっても、競争者が存在する可能性がなくなることになってしまい、したがって、もっぱら彼らの管理のもとで、その価格が固定されることにならざるをえないのは明らかであるが、それこそがまさに訴えられている不満の原因なのである。先の法律以前には、この国中の多数の小さな蒸留業者たちが、その大麦を、近隣の農業者たちが

ら、どちらにとってももっとも便利で利益のある方法で購入し、互いに都合のよい時にそれを麦芽につくりかえ、それを蒸留してスピリッツに転換していたけれども、そうすることによって、あらゆる方面で絶え間のない規則的な需要が存在し、農業者はその穀物をつねに確実に処分していたのであった。これは、交易の確定した経過であったが、それについて著者は無関心であって、さらに悪いことには、そのようにおそっているのである。だから、「材料が使用される前に麦芽に転換される必要があるのだから、小さな交易人<営業者>たちが、農業者たちからその材料を購入することは決してなかった。⁽²⁾」などと言うのは大変粗雑な間違いである。

第2に、彼の言うには「材料、大麦そして燃料などがかさばる性質を持っているために、大きな蒸留業者が、その国のはなはだ遠ざかった諸地域に住むことになる。そしてそれ故に、彼らが会合を持ったり、結合を行なう危険は全くなくなる。⁽³⁾」と。これは確かに非常に巧みな想定であるが、これらの新しく大きな営業者たちはすべて、互いにその国の、遠く隔たった内陸部の地域に分散することになるが、この場合とくに燃料が運搬される距離が大きなものにならない。反対に、次のことは明らかである。彼らは海の沿岸や、その国の町や人口の多い諸地域の近くに住むようになるが、それは、そこなら燃料が安く、彼らの材料や生産物がたやすく運搬されるに違いない。これは常識に照らして明らかであるが、現行法のはらむ最大の困難の1つは、この国のすべての内陸諸地域は、燃料が豊富で、大きな蒸留業者だけが設立される町や海の沿岸まで、自分たちの穀物を運び出して、そこから彼らの使用に必要なあらゆるスピリッツ類を持ち帰るという点で、ひどく困った状態におかれるようになる、といった事情

(2) 「これらの諸規制は、その市場に多数の大規模な蒸留業者を、競争者として登場させるのだから、大麦をめぐる競争を減少させるどころか、増大させる傾向を持つ。」という個所と、「材料が使用される前に麦芽に転換される必要があるのだから、小さな交易人<営業者>たちが、農業者たちからその材料を購入することは決してなかった。」という部分は、『クーラント』9月27日号における原典の<以下同様>、「これらの諸規制は、大麦をめぐる競争を減ずるところか、増大させる傾向を持たないだろうか？ というのも、小規模な業者に限らず、そのうちの誰ひとりとして、農業者からその材料を購入できないだろうから（というのも、大麦は麦芽にしてはじめて利用できるものなのだから）。それらの諸規制は、当の市場における競争者たちとして、多数の大規模な蒸留業者を導き入れる。」という個所を、自由に分解して、意識したものと思われる。以下の引用についても同様であるが、10月4日の記事は、9月27日号の記事において、ローマ数字の示された8項目の「示唆」に対するコメントという体裁をとっていて、どの議論が先行する記事のどの項目に相当するのかがある程度は明らかである。以下の注では、当該項目中の議論と、10月4日の引用との相違が示される。

(3) 「材料、大麦そして燃料などがかさばる性質を持っているために、大きな蒸留業者が、その国のはなはだ遠ざかった諸地域に住むことになる。そしてそれ故に、彼らが会合を持ったり、結合を行なう危険は全くなくなる。」は、原典では、「大麦や、燃料のような素材は、かさばる性質を持っているために、彼ら<業者>はその国の非常に不便な諸地域に住まなければならない。そこで、彼らが、頻繁に会合を持つのが不可能となって、そのため、自分たちの結合を形成することも、維持することもできなくなるのである。」となっており比較的忠実な引用とみなせる。

にまさしく由来する。しかし、これらの大きな蒸留業者たちが、頻繁に会合を持てるほど、互いに近くに住んでいるかどうかは、まったく重要ではない。彼らは、その一人一人がみずからの領域では独占的権利を完全に行使するであろうから、結合などに入り込む必要は全くないし、もしも、こうした状況で、事情によって彼らの利益を追求する方法を、彼らが知るための会合や結合が、彼らに必要となれば、彼らには、彼らの蒸留酒壺と同様にぎっしり詰まった頭脳があるのに違いないのだから。

第3に、聞くとくによれば、「交易はなんの制限のもとにもないのだから、形成されるかもしれない結合があるとすれば、その法外な利潤が他の者たちの創業を誘発するから、それが事態を標準に戻すであろう。」⁽⁴⁾と。なんの制限もない状態にある交易、ということでこの著者が、言わんとすることは明らかではない。非常に大きなストックや大規模な蒸留所を持つ者だけにそれ<交易>が限定される場合には、それは、制限のもとにおかれるのみならず、その国にとってもっとも絶えがたい性質を持つものとなるのは確実である。さらに、交易に入り込み、利潤を下落させるものもある点については、物事の性質とそれに伴う大きな費用との双方の点から、これが一定程度を超える可能性がないのは明らかであり、さらに、その消費がある定程度以上に進むはずがないから、多くの競争者によってその利潤がわずかなものになれば、すぐに、彼らの数は必ず途絶え、買い手は再び少数者のなすがままとなる。

第4に、書かれていることは、「大きな蒸留業者は、直取引きで通常よりも良質で安く大麦を購入するので、節約を行い、小さな蒸留業者よりも常に安く売ることができるのだから、そのために次のことは明らかのように思われる。つまり、数年にわたって、彼ら<大蒸留業者>は、そのほかの者たち<小蒸留業者>が免れていた税を支払ってきたけれども、安く売ると言う点で、彼ら<小蒸留業者>に引けをとったことは決してなかったのであった。」⁽⁵⁾と。ここでの見

(4) 「交易はなんの制限のもとにもないのだから、形成されるかもしれない結合があるとすれば、その法外な利潤が他の者たちの創業を誘発するから、それが事態を標準に戻すであろう。」は、原典における、「交易になんの制限も加えられていない現在、彼らが同じこと<結合>をやろうとすれば、法外な利潤に誘われて、多数の者たちが、同じ方法で営業を開始するようになり、その者たちの競争がまもなく、この交易の利潤を、通常の水準のところまで引き下げるであろう。」という個所を指すものと思われる。

(5) 「大きな蒸留業者は、直取引きで通常よりも良質で安く大麦を購入するので、節約を行い、小さな蒸留業者よりも常に安く売ることができるのだから、そのために次のことは明らかのように思われる。つまり、数年にわたって、彼ら<大蒸留業者>は、そのほかの者たち<小蒸留業者>が免れていた税を支払ってきたけれども、安く売ると言う点で、彼ら<小蒸留業者>に引けをとったことは決してなかったのであった。」という個所は、「大きな蒸留業者は、燃料や大麦の購入で節約できるので、(というのも、彼らは直接購入によって、品質と価格の点でより有利にそれを手に入れるから)、いつも小さな蒸留業者よりも安く売ることができる……」という個所と、「数年にわたって、彼ら<大蒸留業者>は、他方<小蒸留業者>が免れた税を支払っても、なおかつ、

解のすべては、事実の点でも、理にかなった議論の点でも、間違いである。大きな蒸留業者が燃料を節約するということは、決して真実ではない。反対に、次のような点が彼のこうむる大きな不利益の1つである。すなわち、彼の大きな蒸留所は、燃料の大量消費が必要であり、実際にその原因となるが、小さな蒸留所は手軽で安価な製造が可能であり、その国の内陸諸地域で調達されるピートやその他の燃料によって、小さな蒸留業者は非常に穏当な価格で販売するのが可能となる。さらに直取引ならより安くより良質な物が購入できるということについては、小さな蒸留業者は、その国中に分散しているために、彼らの材料をほとんど手近に、なおかつあらゆる種類について所持しているので、ここでもまた有利な立場にある。だから、彼らがその作業を遂行できる上で経費が少なく便益性に優れていることの結果として、彼らは必ず最低の価格で販売することができるのはまったく明白なことである。誰にでも知られているこの事実によれば、次のことは議論の余地なく明らかとなる。この上もなく純粋なハイランド・ウィスキー1パイントは、従来通常18ペンスで、時には16ペンスもの安さで販売されてきて、しかも妥当な利潤 *reasonable profit* があつたのだが、不幸にしてわれわれが大蒸留業者たちのくびきの下に入れば、いまわしい飲み物、さらにまたオランダのジンやフランスのブランデーなどに対しても、われわれは、2シリング、ないしはしばしば2シリング4ペンスも支払わなくてはならず、また、彼らがいかに途方もないところまでそれを釣り上げるのか分らないと、人々に考えさせることになってしまう。

大蒸留業者が、他の者たちが免除された税を支払っているということについては、真実がすっかり語られ、日々行われている不正や目こぼしが洗いざらい明るみに出されれば、関係者や、事情に精通しているにもかかわらず、あえて彼らを擁護しようという人々が、ただ辱めを受ける結果となるだけかも知れない。

第5に、大小の蒸留所で製造されるスピリッツのさまざまな品質について、この著者は、その主題に関する知識がないと主張して、この問題について検討が行われなくてはならないと提案を行なっている。⁽⁶⁾ この検討を行なうしかるべき方法に彼が思い至る時まで、2つのそれぞれの方式において、作業を行う異なった道具や方法を検討し、この国で老練な女性を探して、一方の方法が他方よりも優れているということに対して、非常に満足の行く根拠をおそらくこの

安く売るという点で彼らに引けをとったことは決してなかった」という個所との、合成であろう。

(6) このパラグラフには、引用を示す個所がないが、第一のセンテンス、「大小の蒸留所で製造されるスピリッツのさまざまな品質について、この著書は、その主題に関する知識がないと主張するのであるから、この問題について検討が行われなくてはならないという提案をしている。」は、原典の相当パラグラフ第一センテンスの、「スピリッツの品質について、次のように問われたとしよう。(というのも、私はこの問題について、確かな知識があると敢えて言うつもりはないから)」に相当している。

人に与えることについて、助言を求めているように、この人に忠告されてもよい。

第6に、言われていることは、「100ガロンの蒸留所は、ほんのわずかな資本で創設できるのだから、麦芽製造所 (maltstree) の現状にみるように、この国ではまもなくありふれたものになるであろうこと、また、この法律以前に、農業者は、現在と同様に穀物を遠路はるばる運搬しなければならなかったが、さらに、麦芽にした後で、蒸留してもらうために、ちょうど同じ道のりだけそれを運び戻すという不都合⁽⁷⁾があった、ということ」]、である。このように大きな蒸留所の1つが、あるいは麦芽製造所と著者が呼ぶものが、ごくわずかな費用で建設されうかどうかは、検討に値するほど重要なことではない。早晩こうした蒸留所がこの国に1つもなくなるか、少なくともそれらがほしいままに排他的独占権を行使することはなくなることが期待される。しかし、著者の申し立てである、小さな蒸留業者が、麦芽にしてから再び持ち帰るため、現在同様に、自分たちの穀物を遠路はるばる運搬しなくてはならなかった、ということについては、すでに示唆されたことだけれども、それは事実をまったく無視していることに由来している。麦芽の製造における彼ら自身の技術や勤労が、そうしたことをまったく不要なものにしており、製造されたならば彼らのスピリッツはたやすく運搬されたのであった。

第7に、著者が提案するのは、「これまでこの国中の小さな蒸留業者たちによって、自分たちの家畜用に穀物を供給されていた人々は、今では、ある程度は彼の大麦に対する一部支払いという形で、それを20マイルも離れた大蒸留業者たちから手に入れるべきである⁽⁸⁾」、ということである。

(7) 「100ガロンの蒸留所は、ほんのわずかな資本で創設できるのだから、麦芽製造所 (maltstree) の現状にみるように、この国ではまもなくありふれたものになるであろうこと、また、この法律以前に、農業者は、現在と同様に穀物を遠路はるばる運搬しなければならなかったが、さらに、麦芽にした後で、蒸留してもらうために、ちょうど同じ道のりだけそれを運び戻すという不都合があった、ということ」という個所は、原典の該当パラグラフ全体を換骨奪胎したものであって、相当個所は、「100ガロンの容量を持つ蒸留所は、モルトがま、納屋、穀物倉庫などの建設に必要とされるのと同じくらいわずかなストックで建設されるのか？ さらに、こういう訳で、この規模の蒸留所は、現在麦芽樽がそうであるほど、この国でありきたりのものとならないのか？ その場合、現実がそうであるとしても、現行法に対する一大反対論は、すっかり消滅させないのだろうか？「言われて来たのは、農業者は、以前は国内で平和に穀物を蒸留していたけれども、今では、この国の多くの地域において、大規模な蒸留業者の元へと、20から30、あるいは40マイルにもわたって穀物の運搬を強いられ、彼ら<大蒸留業者>と言えば、農業者がやって来ても、自分が価値を見いだす限りにおいてだけ彼を利用するということである。」この法律以前にも、農業者は、現在そうしなければならないのと少なくとも同じ位の距離にわたって穀物を運搬しなければならなかったのは、事実だけれども、この不都合が加わって、蒸留してもらうため、麦芽となった後で、同じ道のりだけそれを運び戻さなければならない。」であろう。

(8) 「これまでこの国中の小さな蒸留業者たちによって、自分たちの家畜用に穀物を供給されていた人々は、今では、ある程度は彼の大麦に対する一部支払いという形で、それを20マイルも離れた大蒸留業者たちから手に入れるべきである」と言う個所は、原典における「麦芽にするため、

ある。これは、屠殺肉の価格を引き下げ、その国の遠隔地を改良する、確かにすばらしい考えである。しかし、ヴァン・ハーク男爵の方法を試みて、はるかに容易に運搬される穀物からエーテルを取り出すことの方が、より良いのかどうか提起されているのである。あれこれの事柄に述べていることはすべて、小さな蒸留業者たちが、穀物を麦芽にして再び持ち帰るのに20マイルも運搬することを想定する点で、同じ過ちに由来している。

第8に、著者は、これまで小さな蒸留業者であった農業者に対する思いやりをなくしているが、彼ら<農業者>が蒸留から得られるリカーにおぼれて健康を害することなく、「彼らの勤労を1つのしかるべき経路、つまりその国の改良に集中することを提案している。⁽⁹⁾」しかし、少し関心を持ってみれば、著者は、ある国に貨幣が持ち込まれないなら、改良はまったく進展しえないか、あるいは非常にゆっくりとしか進行しないに違いない、と考えるようになる。そして、過去の貨幣の状態がどれほどわずかなものであったと考えられるにせよ、確実な事実であるのは、この国の多くの地域で蒸留されたスピリッツの価格が、そこに投じられた貨幣の第一の源の一つであり、これがまた、他の職業による妨げをほとんどもしくはまったく受けていない、勤労の行使から生まれたものだ、ということである。それに劣らず確実なのは、彼らの追加的な就業が生まれ、彼らの近隣のすべての農業者に対して手近な穀物市場を生み出し、それによってその国の農業を大いに刺激したことである。

この著者が大層骨を折って来たのは、スコットランドのジェントルマンたちが、現行法に反対の決議を行えば、確実に起こるはずの、危険な結果について彼らに警鐘を鳴らし、あわせてそれに反対する現在の試みにとって、いかに不都合な状態となるのかを示すためであった。彼が語りかけた人々は、彼の創造力の賜物である化け物によって脅かされることは決してない。彼らは、非常に尊敬すべき一団であり、豊富な知識と情熱の持ち主であるから、その国の利益

自分の穀物を20マイルも運搬し、さらに蒸留してもらうために同じ距離を持ちかえて、これまで自分の家畜用穀物を確保するのを常として来た農業者が、今度は大麦に対する一部返済という形で、同じ骨折りと交換に穀物を手に入れることができる。」を短縮したものであろう。

- (9) 「彼らの勤労を1つのしかるべき経路、つまりその国の改良に限定することを提案している。」という個所は、原典における「酔いをもたらすりカーの中で絶えずバタバタしていることから、農業者の勤勉や経営に生ずる危険のことは言うまでもないが、勤労がひとつの、しかもそのしかるべき経路に限定される状態は、彼の勤労にとって何がしかの改善にならないのだろうか？ かなりの程度に改良が行われている国々においては、このことが常に当てはまる。しかしながら、この改革が焦眉の急であるような諸地域、つまりハイランドや国境諸地域においては、そうではない。ある程度のそうした補足的就業がなければ、農業者はしばしば仕事に事欠くことになることも、反論されうる。改良の方法という点で、今なお多くのことが行われなくてはならない状態にある国々においては、農業者は決して怠惰であってはならない。」という個所のかなり強引な要約である。

に少なからず関係している問題についての、彼らの正当な不満が、ブリテン議会の聴聞を受け、粛々と検討されるであろうと、考えることができる。だから、彼らは、この問題について公の出版物における演説に際し、このはなはだ分別に欠ける議会の法律の敵対者に対して、人類の中で最低のもっとも卑しむべきものだとか、われわれの自由と基本法に対する仇敵であるとかと言った、穏やかで慇懃な名称によって、あえて烙印を押そうと考えて来た人々については、しかるべく計らうように、考えるであろう。

3. む す び

この論説以外の記事においては、軽々に使用されてきた競争という概念について、著者は、需給の両側面における諸条件に異なった光を当てながら、また蒸留業に特有の地域的な市場構造から視点を離さずに、粘り強く大規模蒸留業者の参入にともなう諸問題に注視しているが、おそらく最も重要なのは、第8番目の項目において、一見怠惰の原因であるかのように言い立てられてはいるが、小規模な蒸留業者の手から、アルコールの製造が奪われるようになれば、これまで小規模な蒸留業者を兼ねていた農業者に、わずかばかりではあったにせよ、改良の源であった貨幣が残らなくなり、まさに著者の言う勤労の進展の途が閉ざされてしまうことこそが、もっとも忘れられてはならないのだとの指摘であろう。蒸留業を一挙に大規模化することは、スコットランドにおける勤労の芽を摘み取ることにともなりかねない、との懸念が著者には存在するのである。

晩年のステュアートの関心の対象のひとつは、フランスの財政と収入状態であったと伝えられる。⁽¹⁰⁾ この論説が、そうした文脈でどのような含意を持つのか、そうした点については今後の課題として残されるのである。

(10) Skinner, Andrew S., Introduction section 1: Biographical, p. lxiii, in *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy* by Sir James Steuart, Edited by Andrew S. Skinner with Noboru Kobayashi and Hiroshi Mizuta, London, 1998.